

## 薬剤師機能高度化と生涯学習の行方

内山 充

薬剤師業務に対する社会的要求と期待の高まりを受けて、薬剤師業務への信頼獲得と、業務領域の拡充開拓が急務となって来た。そしてその成否は生涯学習による「人づくり」に懸かっている。生涯学習の目標、体制、あるいは行動原則については、既に国内外でほぼ議論が尽くされているが、わが国では、まだそれらを他人事と思い、さらに、是正すべき現実について目をつぶる傾向が見られる。このままでは、将来の人づくりに不安が残るので、新たな年を迎えて考えるところを述べてみたい。

### 薬剤師機能は実践力

薬剤師の業務は、患者主体の医療に貢献し、地域の保健・医療と生活改善に寄与することを最終目標としているが、それに必要な薬剤師の専門職能（プロフェッショナル）には、知識 技能 心構えであらわされる「能力・適性」と、役割を果たす働きの「機能」がある。能力は知的財産で身につけるものであるが、機能は職務責任を果たす実践・行動の力であり、外部への発信力である。これからは、うまく発信の出来る人が生き残れる。薬剤師の生涯学習に今求められているは、単なる知識等の集積ではなく機能の向上である。

### 生涯学習のカテゴリー

生涯学習の流れには、専門職能全体の向上を目指す方向と、ある特定の課題や領域についての専門性（スペシャリティ）を深めるという二つのカテゴリーがある。両者ともに、学習者自身が自らのキャリア・デザインに沿った目標を定めて学習計画を立てる必要がある。前者の学習歴の証明には、現在「生涯研修認定薬剤師」の制度があり、後者には「特定領域認定薬剤師」あるいは「専門薬剤師」の制度がある。しかしいずれも任意の団体の制度であり公的な資格ではない。

### 機能高度化に応える専門性向上の動向

機能の高度化は薬剤師業務のあらゆる領域について求められている。特に薬剤師機能発揮が期待される分野で、医療貢献に必要と思われる領域について、先見的なグループ、あるいは職域団体や専門学会により数年前から始められた特定（専門）領域認定制度には、自らの職能の高度化や各種のメリットへの期待、あるいは称号取得の魅力もあって関心が集まりつつある。

米国での専門薬剤師は、APhA（米国薬剤師会）が設立（1976）したBPSに続いて、職域団体が設立した同様の機能を持つ約10か所の民間機関が専門領域の検定と称号授与を行っているが、称号受領者の数はさして多くはない。米国は、称号や肩書よりも、本人の発信力と実際の働きを評価し重視するためであって、これは見習うべきである。

## 資格、称号の取得が学習目的ではない

わが国には、資格や称号を欲しがらる根強い国民性がある。生涯研修の目的は、あくまでも患者と医療に役立つ資質向上にあるのであって、決して単位（シール）集めや、資格や称号（肩書き）の取得が第一義ではない。膨大な数の研修単位が単なる出席で給付されたり、1研修に2種類の単位が発給されたり、認定証発給者が受領者の能力に責任を持ってないというようなわが国の現状は、良識をもって速やかに是正しなければならぬ。

## 学習認定には信頼性の保証が必須

一方、専門職能を十分発揮できる薬剤師の存在を世間に知ってもらうためには、学習とその質の評価、並びに学習履歴（成果）を証明できる認定証が必要となる。いずれの認定証も、信頼するに足る機関の実施する制度のもとで発給された、質の高いもので無ければ社会的信頼は得られない。そのために第三者機関の評価を得ておくことが大切である。言うまでもなく、認定取得後でも本人の職能が実務の上で期待通りに発揮されなければ、たちまち信頼を失うこととなるということを忘れてはならない。

## 評価体制

薬剤師に関しては「薬剤師認定制度認証機構」が、医療職の中で最も早く（2004年）発足し、本年7月には新制度下の「公益社団法人」の認可も受けており評価体制は整備されている。現在までに十数カ所の生涯研修実施機関が認証を取得し、適正な生涯研修と認定制度を推進しており、かなり望ましい体制になっているが、まだ旧態依然たる慣例の残っているところもある。

医師の専門医制度や看護師領域でも、現在それぞれ評価制度の整備が進んでいる。

## 生涯学習実施者の実行と協力

生涯学習によって学ぶべき課題は、既に幾多の有識者によって十分に示されており、効果的な成果を得た経験も紹介されている。しかし、高齢者ケア、OTC、生活習慣等、将来、研修・認定の制度化が望ましい領域も残されている。

今や言うべきことを言う時代は過ぎて、行うべき時代だと言える。生涯学習実施者の立場にある者は「誰かがやるべきだ」と考えるのではなく、学習者の発想に沿った生涯研修の新しい制度を作るなど、自分がやるべき問題と、できる課題とを見つけてほしい。その時に、自らの利益のためや、前例の踏襲だけしか思い浮かばないようでは、これからの体制に参加する資格はない。

また、往々にして「新しい考え方に対しては、必ず偏見に満ちた抵抗勢力が現れる」というが、適正な発想を育てるために、関係者全員の積極的協力が必要である。

## 地域職域団体の参加を期待

既に各地域の職域団体では、多くの優れた生涯研修実績が積み重ねられつつあるが、全国の薬剤師に対して、きめ細かい生涯学習の一層の普及を図るには、地域の職域団体の自主、自律的関与が期待される。それぞれの地域における薬剤師の生涯研修の核となる、信頼性のある研修・認定制度を発足させることを検討していただきたい。

### **学習者に最も大切な学習記録（ポートフォリオ）の作成**

生涯学習の原則は基本的に「自発性」にあり、「学習者」の観点が優先する。学習方法としてグローバルに同意されているのは、学習者が自分の能力を自己査定し、それに基づき学習計画を立てて学習に参加し、成果を正しく評価しそれを次の計画に生かすという「CPD サイクル」の実践である。

そこで最も大切なのは、取得した単位を証拠として、学習の計画と内容、及び自己評価を自ら記載した学習記録（ポートフォリオ、形式自由）を作ることである。これが各自で作れるかどうかが生涯学習の成否を分けると言うて良い。

### **学習したことが報われる社会の構築**

上記学習記録は、学習者の能力・適性及び機能の向上歴を示すものである。これを職務上の、あるいは組織内処遇の評価に生かすのは管理者（決定権者）の責任である。学習が報われることにより、活力ある、発想豊かな業務環境ができて、薬剤師の仕事に、より多くの価値観が生まれ、社会的信頼を得ることもできる。

将来は、実務薬剤師の「免許更新制」、あるいはそれと同意義の「生涯学習の義務化」を、行政による制度ではなく、職域による自主的、自律的な制度として発足することが出来れば、より高い社会的信頼を得ることが出来よう。